

大相撲観戦印象雑記
～平成25年秋場所を終えてひとこと～

<1> 当然か？ やっぱりか？

白鵬の優勝はおおかたの予想通りだったので、あまり驚く人はいないだろう。殆どの人が関心を持っていたのは、「何日目まで誰が並走するだろうか？」ということだけかもしれない。

もう一人の横綱と大関陣の中に並走者が出てくるのは極めて当然のことであるが、この当然のことが実現しないのが現状である。

千秋楽の表彰式後のインタビューで「七年後の東京オリンピックまで横綱でいたいという夢」を語っていた。

「これはあくまでも夢である」と結んでいたようだが、現在28歳なので可能性はないわけではない。

今場所を終わった所で、通算786勝175敗21休・幕内在位692勝127敗21休みという記録。

もし夢が実現したら・・・、飽くまでも数字遊びにすぎないが、年間80勝ペースで560勝、年間70勝ペースでも490勝が上積みされることになり、恐ろしい記録になる。

日馬富士は二日目の松鳳山戦と四日目の碧山戦の負けが余分だった。松鳳山は研究に研究を重ねて横綱の欠点を探し出して攻め立てるという素晴らしい相撲だった。この取り組みでは、横綱のふがいなさを責めるよりもむしろ松鳳山を褒めたい感じがした。しかし、相撲の基礎が備わっているとは思えない腰高で不安定な体力勝負だけの碧山に簡単に土俵外へ持って行かれてしまった日馬富士は何とも情けない。相撲取りの命綱である足と手に故障があるように見えるが、回復・復活を祈るしかない。

<2> 注目されている稀勢の里

稀勢の里は比較的落ち着いた相撲でスタートして、中日までを1敗で走った。焦って攻めて行くことなく、じっくりと攻めて慎重に勝ち星を得ていた感じがしたが、悪い癖の「腰高」と「反り身」が顕著だった。いつかはこの欠点をつく力士が出てくるだろうなと思って見ていたら、やっぱり取りこぼし・・・。

隠岐の海戦は腰高と脇の甘さを突かれ、千代大竜戦は腰高に一発をくらって反り身を攻めまくられた。

右で上手を取ろうとして、脇の甘さをつかれることが何年も繰り返されている。この年齢で改善が可能なかどうかかわからないが、「右前ミツねらい」の相撲に切り替えることを提言したい。いくらかでも腰が下りて、右脇の甘さが解消できる上に、持ち前の馬力が活きるのではないかと思う。

マスコミが「横綱！横綱！」と騒ぎ立てて煩い上に、相撲協会の要職に就くものまでが「これでは綱取りはむりでしょう」などと公言する。審判部長が「特定の現役力士の将来への道を具体的に否定する」のは如何なものかと思う。これで冷静に相撲を取れと言う方が不思議な気もする。

<3> 目覚めたか豪栄道 しかし・・・

今場所の豪栄道の相撲は、「前進相撲」でしかもスピードがあり、臨機応変の身のこなしが光っていた。

とは言っても、攻めきれなくなると叩いたりいなしたりの逃げ腰の相撲を取る癖が何番もの取り組みで見えた。この癖が直れば相撲勘・スピード・技術・闘魂すべての点で優れたものを持っており、この先が期待できる。相撲関係者やマスコミは直前三場所の瞬間風速ばかりに目を向けて「大関候補」と騒ぎ立てるが、辛うじて勝ち越したような場所も多く、まだ安定しているとは思えない。

これまでに五人の大関を番付に連ねたがさしたる成績を上げる者がいないばかりか、いつも誰かが二場所毎に勝ち越しと負け越しとを繰り返すような状態になったことがあった。固有名詞はともかくとして、「関脇じゃないの？」と言いたくなるような大関が何人かいた。大関昇進への関門を厳しくすることで強い大関を作り、強い横綱誕生に繋がるようにしていかなければならない。

直前三場所の星勘定は単なる参考データとして、「年間勝ち星で安定性も見る」など幅広い視点での評価方法で昇進を審議して行く必要があると思う。

<4> 今場所のトピックス

二日目「松鳳山が初めての金星」をあげて「金星に男泣き」として話題になった。平幕力士が横綱を破ると、給金に「金星加算金」が付く。基本給与のベースが上がり、生涯の給与にプラスになる。横綱を破るという名誉の他に経済効果ももたらす。これで日馬富士が優勝または準優勝の成績であれば、松鳳山は殊勲賞になる可能性もあったが・・・。

日馬富士は、話題のほとぼりが冷めぬ四日目、碧山にも涙の金星を献上。どこかの国の政策のように、ばらまきし過ぎは効果半減、今度はあまり話題にもならなかった。おまけに碧山の今場所は6勝9敗。

安美錦が14日目の相撲で怪我をして千秋楽を休場し不戦敗となった。当然のことながら対戦相手の隠岐の海は不戦勝で場所を終わった。ところが、この一勝によって辛うじて勝ち越しができたばかりか、小結・関脇が各一名ずつ負け越してしまったので、東前頭二枚目の隠岐の海に三役返り咲きの可能性が出てきた。

星ひとつの運・不運はこの世界には沢山あるようだ。このラッキーを利して弾むようであれば、隠岐の海は大物といえるだろうが・・・。

<5> 三賞への感想

殊勲賞・技能賞・敢闘賞の三賞は相撲記者クラブが審議して決めているが、最近「あれっ？」と思うようなことが多い。今場所の「殊勲賞 豪栄道」は、優勝した横綱に1敗を与えたこともあり、総合評価としても特に異論はない。

技能賞常連の妙義龍や安美錦が不調だった（安美錦はそれでも9勝6敗）こともあり、この賞に値する力士は確かに見当たらなかった。

敢闘賞には、日馬富士・琴欧洲・琴奨菊を破ったことが評価されて東前頭筆頭の松鳳山が選ばれた。松鳳山は好きな力士で応援もしており、批判をするつもりはないが、今場所の敢闘賞には他にも適した力士がいたような気がする。39歳で8勝7敗の成績を上げて歴代の記録を塗り替えている旭天鵬、連日全力を出し切って気持ちの良い相撲を見せてくれる升ノ山（8勝7敗）、14日目から休場してしまったが、基本通りのきちんとした相撲をとる新入幕の遠藤（9勝5敗1休）など充分に受賞に値するような力士がいた。

また、相撲協会が毎日観客アンケートとして「敢闘精神あふれる相撲を取った力士ベスト3」を毎日発表しているが、このデータはどのように使っているのだろうか？まさに敢闘賞の選考基準の中に加えるべきものではないのかという気もする。

敢闘精神あふれる相撲の観客アンケートは相撲協会がやっていることなので、「今場所の特別賞」として毎場所理事長から表彰を行う方が前向きな感じがする。そして、その力士を選んだお客さまの中から何人かに受賞力士の手形を記念品として提供するようにすれば相撲協会と観客席とが一体となった盛り上がりの一助となると思うが。

<6> 仕切りと立ち合い

相変わらず「きれいな立ち合い」が見られないし、両力士の呼吸を合わせた姿が感じとれない。そしてかなり頻繁に「待った」がされている。一番の原因は「手つき」のルールが不明確である所から来ている。

現在のルールでは、「両手をついて立ち上がる」か、「片手をついた状態で、もう一方の手をチョンつき」するか、のいずれかで立ち合いが成立することになっている。

また、両手をきちんとついて静止状態から立ち上がる力士や両手または片手をついて静止状態から立ち上がる力士と、立ち合いの瞬間まで手を土俵に下さない力士とがいることが事を難しくしている。

両手をついて静止状態から立ち上がるきれいな仕切りの力士は白鵬・妙義龍・豊真将などで、腰の位置が低い所から立ち上がるので相撲にも安定感がある。一方なかなか土俵に手を下すことができない力士は、その殆どが腰高の相撲またはけれん相撲の力士のようにも見える。琴奨菊・琴欧洲・稀勢の里らは、立ち合いに手を下し渋る時には殆どの場合負けている。

こんな切り口から見ても、立ち合いがきちんと出来ている力士は相撲の基本が身に付いている力士であり、これらの所作がきちんとしているか否かは部屋によって偏りがあるようにも感じられるので、面白い。

立ち合いの正常化には、仕切りの正常化が必要である。呼び出しの声で土俵に上がり仕切りを繰り返す、この間に一瞬たりとも相手から目をそらさない白鵬の立ち合いまでの所作は素晴らしい。栃錦・若乃花を筆頭に、過去に名力士と言われた力士達にも共通している。勝負は土俵に上がった時から始まっているのだ。

<7> 物言いのタイミング

土俵際のもつれから物言いが付く勝負が多くなった感じがする。「最後まで勝負を捨てない熱戦」と評価する人も多いが、この他に「前進相撲を取らず、後退しながら勝機をうかがう相撲」が多くなっているせいもあるような気がする。

白鵬・稀勢の里戦は土俵中央での流血の熱戦になり、さすがに横綱と大関の勝負と言えるような戦いだった。最後は白鵬の叩き込みで決着が付いたが、物言いが付いた。物言いの内容は、「白鵬が稀勢の里の髷を引っ張ったのではないか？」の確認ということだった。結果は、肉眼で見ても白鵬の指は髷の中に入っていないかつ、ビデオ再生で見てもその事実はなく、軍配通り白鵬の勝ちとなった。

「疑わしく感じられた勝負は物言いを付けて確認する」というのは、勝負に疑惑が残らず良いことであると思う。しかしながら、このケースでは「軍配に従って勝ち名乗りを受ける」段階まで進んでから物言いが付いた。「行司の軍配に対して物を言う」のが自然の姿で、物言いが付かなかったから勝ち名乗りの段階に進むのであって、ここまで進んでからの物言いには違和感がある。

裁判で、判決後の控訴が許される期間を過ぎてから控訴をするような感じで、常識的ではない感じがした。

「物言いを付けられるのは、行司が勝ち名乗りの所作を始める前まで」とすべきではないか。

以上